



渡辺 大直

野菜や果物、魚は季節によ
ってとれるものが違い、最も
おいしくなる時期、“旬”が
ある。しかし肉や牛乳、卵な
どの畜産物は一年中食べら
れ、旬がない。そんなことか
ら畜産には季節感がないとい
われるが、昔の牛飼いは季
節による変化があった。

以前紹介した新温泉町出身
の書家、宇野雪村の『但馬牛
牛小屋で お産を見た 子
牛と河原で 親牛を長谷に放
つて 陽の落ちる頃 田んぼ
道を 牛と歩んだ』には、牛
飼いに季節感があつた頃の情
景が描かれているように思
う。

当時、但馬では春から初夏
が種付けシーズンで、冬から
農耕牛の時代、春から田植

春先にベビーラッシュとな
り、季節繁殖と言われた。雪
村は庭先に雪が残る牛小屋で
お産を見たのだろう。

季節繁殖は、ビタミン豊富
な野草を食べられる春から初
夏が交配に適しているので始
まったと思われる。

但馬牛や神戸ビーフに旬が
ないとはいえ、需要が増える
年末年始には値が上がる。2
〜4月頃に生まれた子牛は、
肥育農家が年末年始出荷用の
子牛を仕入れる10〜12月の子
牛市に出荷適期となり、高値
で売れた。そんなこともあつ
て季節繁殖が根付いたよう
だ。今も但馬は、10〜12月市
に出荷される子牛が他所より
多く、季節繁殖の名残と言え
るかもしれない。

畜産は季節感がない？



牧場公園に放牧された但馬牛

えまでが牛にとって忙しい季
節だ。田を起こして耕耘し、
代掻きをする。代掻きが終わ
ると牛の田んぼ仕事は一段
落。草が茂る夏の間、河川敷
や里山に放牧された。

この頃は親子一緒に放牧
し、朝、放牧地に連れて行き、
夕方、牛小屋に連れ帰った。
道中、子牛に綱は付いていな
い。好奇心旺盛な子牛は時々
道草をくい、親牛から離れる

と慌てて追いかけた。雪村が
書いたのはそんな光景のよう
に思う。

1960年代、耕運機が普
及し、但馬牛は肉用牛に変貌
した。現在、飼育規模が大き
くなり、一年を通じて子牛を
生産し、子牛を離乳する時期
が早まり、親から離れて同じ
くらいの子牛を一緒に育てる
ようになった。放牧も、妊娠
を確認した成雌牛だけを夏の
間、昼も夜も出しっ放しにす
る方式に変わった。

牧場公園も近くの農家の牛
をゲレンデに放牧している。
夏が終わり、先日、牛たちは
それぞれの牛舎に帰っていつ
た。放牧は省力的で、里山や
ゲレンデの草の管理ができ、
牧歌的な情景を醸し出すだけ
でなく、今わずかに残る季節
感のある飼育方でもある。こ
れからも続いてほしいと思
う。

■筆者プロフィール■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜
坂出身。県職員として
畜産行政に長年携わっ
てきた。県立但馬牧場
公園「但馬牛博物館」
館長。